

【実践報告】

通訳・翻訳訓練法をとりいれた授業と学生モチベーション

O'Connell, Sean

南山大学

Abstract

This paper examines the practicality of a two-semester elective general education English course taught to third and fourth year students in the Faculty of Policy Studies at Nanzan University, Nagoya. The two-semester course (basic and intermediate skills) focuses on practical Japanese-English interpreting and translating skills for the workplace. Guided by ESP theory and its characteristics, the aim of analyzing these courses is to determine the practicality of the applicable skills taught during the two semesters. Using an open-ended survey and semi-structured interview as a follow up, students taking the course were asked to reflect on issues of study motivation and the practicality of the skills they learnt. A qualitative analysis of the survey and interview responses is discussed in this paper and aims to show how a focus on practical skills acquisition can indeed contribute to high levels of study motivation and a sense of practicality among students.

Keywords: ESP, practicality, student motivation, interpreting, translation

I. はじめに

社会のグローバル化が進むにつれ、職場で英語が使える人材に対する需要が日本でも年々高まってきていることは言うまでもない (Chapman, 2003; British Council, 2006)。Orr (1998) が示すように、ESP (English for Specific Purposes) 教育のカリキュラムに置ける明確な位置づけや実用性がますます求められるようになって来ている。

それを背景として、大学・学部教育理念とニーズ、及び学生のニーズに合った適切な英語教育を行なう必要性が認識されるようになってきた。筆者が勤務する南山大学総合政策学部では、教育目的として「グローバルな環境において問題発見及び解決ができる人材の育成」に力を注いでいる (原田・石川・渡辺・中郷・松本・樗木, 2008)。2001年に学部が開設して以来、当学部の英語教育プログラム (NEPAS: NENZAN ENGLISH PROGRAM AT SETO) は、英語で学び英語で発信する「使える英語」の育成を目指して、

学部教育目標達成の上で必要不可欠な役割を果たして来た。英語を学ぶだけではなく、英語で問題発見・問題解決を行うことができるようなスキルをさらに高めるため、学部教育と英語教育のシナジー的アプローチを柱とする取組みを開始し、それは 2005 年度文部科学省から現代的教育ニーズ取組みプログラム（現代 GP）として採択された。その取組の目的は、グローバル社会において「使える英語」と幅広い教養を駆使して、問題発見・解決ができる人材を社会に輩出することである。

現代 GP 取組のスタートに合わせ、2005 年度より、実務英語（筆者が担当する上級英語 A）、職場コミュニケーションスキル（同じく筆者が担当する上級英語 B）、ビジネスプレゼンテーション英語（上級英語 C）、英語で学ぶイベント企画及び交渉、等の実践能力を養成する選択科目が設けられた。これらは直接的に ESP 型授業ではないが、実務英語（上級英語 A）および職場コミュニケーションスキルの授業（上級英語 B）は、ESP 的アプローチを手法とする授業である。言い換えると、Dudley-Evans と St. John (1998) が示す ESP の特徴（General English と教授法が異なること、職場など特定した環境に関連すること等）をガイドラインにデザインした授業となっている。このような背景の中で、筆者は、現代 GP の取組み目標の中の次の 2 項目と関連させて、これらの授業を展開してきた。

1. 英語を学ぶだけではなく英語で学ぶことにより、使える英語の習得を目指すこと。
2. 学生の異文化理解及び意識を高めさせること。

本稿では、著者が担当する上級英語 A と上級英語 B において、通訳・翻訳訓練手法を用いた授業アプローチが、「職場で英語が使える人材の育成」にどのように役立ったと認識されたかについて、学生への質問の結果に基づいて論ずる。

II. 授業で用いた通訳・訓練手法

実務英語スキルを高めることをねらいとして開講されている上級英語の授業は、A（春学期）と B（秋学期）（週 1 回：90 分）に別れる。A は通訳・翻訳の基礎クラス、そして B は通訳・翻訳の応用クラスとなっている。学習目標は、和英通訳・翻訳の基本スキルを身に付ける他に、ビジネスで使われている英語の語彙・表現を学ぶこと、異文化理解を高めること、そして毎週 3 時間程度の授業外学習（ノートテイキング、シャドーイングの練習、ビジネス語彙学習（毎週小テスト実施））を通じて自律学習のスキルを高めることにある。

上級英語の授業展開については、それぞれの週の内容及び目的を以下の表に述べた。

表 1. 上級英語 A の授業のねらいと内容

週	テーマ	ねらいと内容	手法
1～2	翻訳・通訳とは何か	◆ 通訳と翻訳の特徴や違いを理解させる	◆ シャドーイング、ノートテイキングを練習させる
3～6	通訳の基礎	◆ Real world tasks (イベントの挨拶スピーチ) を体験させる ◆ 職場コミュニケーションに起こりうる社員同士の会話を通訳させる	◆ ノートテイキングのスキルを活かせる
7～12	翻訳の基礎	◆ 和文英訳の基本知識を習得させる ◆ ビジネス E メール の和文英訳をさせる	◆ Translation tools (辞書やインターネットの効果的な使用) を練習させる
13	プレゼンテーション	◆ 通訳・翻訳現場について発表させる ◆ 現場の状況を把握させる	◆ 仕事についてのリサーチスキルを身につけさせる
14・15	レビュー	◆ 上級英語の授業内容全体のキーポイントやスキルを復習させる	◆ 習得したスキルを意識させる

表 1 で示したように、通訳と翻訳の基礎的なスキルをブロックに分けて、real world tasks (実社会や職場で起こりうる状況のシミュレーション) (Nunan 1989, Cheung 1997) を作り出し、応用的なスキルを発揮させるような構成となっている。この場合の発揮というのは基礎能力を real world tasks の場面に当てはめて使うという応用力を意味する。また、学期末には、学生自らが、専攻に関連した日本語資料、例えばゼミ関連の資料やビジネス関連の記事を選び、それを英文に翻訳してレポートとして提出してもらうという課題を与えた。

秋学期に始まる上級英語 B は A で触れた職場コミュニケーションをメインテーマとし、表 2 で示されている通訳・翻訳の応用スキルに焦点を当てた。そのため、上級英語 A を履修済みであることが望ましいとしている。

表 2. 上級英語 B の授業のねらいと内容

週目	テーマ	ねらいと内容	手法
1	翻訳・通訳スキル 基礎から応用へ	◆ 上級英語 A をレビューする ◆ 職場コミュニケーションにおける応用的な翻訳・通訳とは何かを理解させる	◆ 応用的な翻訳・通訳スキルを練習させる

2～7	通訳の応用	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 職場通訳の中で実際に起こりうる状況（会議、スピーチ、ビジネスプレゼンテーション等）を体験させる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 応用的なシャドーイング、ノートテイキングを使った通訳の練習をさせる
8～13	翻訳の応用	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 仕事に実際に有り得るもの（授業員マニュアル、ビジネスレター、Eメール、企画書等）を取り上げて和英翻訳をさせる ◆ 外資系企業等の応募に向けての必要なノウハウを覚えさせる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 応用的な和文英訳のスキルを磨かせる ◆ 英語のカバーレター及び履歴書を書かせる
14・15	求職応募のシミュレーション	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 外資系の英語面接を体験させること。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 英語の面接によく出てくる質問を分析し、答えを用意させる

なお、学習目標としては、上級 A に引き続き、通訳・翻訳のスキル習得の他、異文化理解の促進、ビジネス語彙の習得、自律学習スキルの獲得となっている。

III. 本調査

実用的なスキルを学生に習得させることを目標として授業を構成・デザインするにあたり、ESP の特徴の 1 つである、「授業を特定した環境に関連づけること」を念頭におくことが大いに役立った。Orr (1998)が強調するように、ESP 講座を履修する学生のモチベーションは受講前から高い場合が多い。従って、元々高い学生のモチベーションをさらに高めることができるような実用的かつ有用性の高い授業内容を構築することが課題となる。

それを踏まえて、本調査のリサーチ・クエスチョンは、上級英語 A・B でとった ESP アプローチの原理に基づく授業手法が、どれほど学生のモチベーションに影響を与えたか、そして授業内容が学生に有用性を感じさせることができたかを調べることである。このリサーチ・クエスチョンについて、学生が答えた回答記述式のアンケート及び授業観察に基づき考察する。

学生の履修理由、学習モチベーション及び期待をはかるため、秋学期末にアンケートを実施する他、毎回の授業にて行ったビジネス英単語及び和英翻訳の小テストの結果も参考にした。ドルニエイ (2006) が示すように、回答記述式のアンケートは量的なデータを得

るためではなく、限定的な回答を求めるために使うアプローチであって、質的な研究でよく見られる対象人数が少ない場合によく使われる。質問の項目数が少ない一方、質問の表現により自由度が高いため、回答者が自分の言葉で表すことができる。従って豊かなデータを得ることが考えられる。

対象の人数が少ないことから、本調査は一般化できるような量的アプローチに適していないが、その代わり限定した対象者が回答記述式項目について答えた生の声を取り入れ、担当講師である筆者の観察を取り入れる質的アプローチをとることにした。本稿ではアンケートの結果と観察ノートの詳細を分析したことを述べる。

1. 対象

本調査の対象は 2007 年度に上級英語 A と B を履修した学生、総合政策学部の 3、4 年生で、A 講座では 20 人、そして B 講座でも 20 人（全員上級英語 A 履修済み）であった。それぞれの学生が専攻するゼミは、開発経済、NPO/NGO、環境関係、都市開発、国際関係など様々な分野からなっているため、学生が将来のキャリアとして目標としている職業域や企業はさまざまであった。英語のレベルについては受講時に特に測定していないが、全員が 1 年次英語科目受講時には習熟度別の上級クラスを受講した学生である。習熟度別の上級クラスとは、TOEFL ITP (Institution Testing Program) Level 2 (500 点満点) のクラス平均点が 470～490 点範囲であることが 1 つの参考になる。

2. アンケート及び半構造化聞き取りデータ

上級英語 B の第 14 週目の授業（通年で第 28 週目）において、5 項目からなる回答記述式アンケートを実施した。質問項目は英語で書かれていたが、回答者は英語で答えても、日本語で答えても良いとした。アンケートの質問項目は次の通りである。

1. What was your motivation for taking these courses?
2. What were your expectations toward these courses?
3. What skills have you learnt from these courses?
4. Do you think these courses have been practical? Please explain why you feel that way.
5. How would you like to use these skills in the future?

アンケート回答の意味等を確認するため、フォローアップとして半構造化聞き取り (semi-structured interview) も実施した。

IV. 結果

1 アンケート・半構造化聞き取りの結果

アンケート及び聞き取りの結果からは、講座に対する実用性を始め、モチベーション（質問項目 1）などについて様々なことが示唆された。それらを、項目ごとに以下にまとめる。

まず、質問項目 1 について学生の「学習モチベーション」を示す記述回答は大まかに次の 2 項目に分けられる。

◆ 「仕事で英語を使いたい」

第一に、受講した学生は「仕事で英語を使いたい」という学習モチベーション・意識を持っていることが 35 人中 32 人の答えから示唆された。それを表す回答は次の通りである。

"I think that I will need English skills in my future career" (学生 #2)

"I want to work at a trading company and will need good business English skills there"
(学生 #20)

"The increase in international trade even in small and medium-sized companies means there will surely be many opportunities and necessities to use English in business."
(学生 #11)

◆ 「英語の実用的なスキルを身につけたい」

第二に、「英語の実用的なスキルを身につけたい」という意識が学生全員の答えから示された。それを表す回答は次の通りである。

"Translating skills from Japanese to English will make me a more attractive employee."
(学生 #13)

"I have always wanted to learn how to translate and interpret. I think these skills will be very practical in the workplace if I work for an international company." (学生 #10)

"I have spoken to many of my sempai (seniors) who are working now. Some of them can speak English and told me that having translation skills would be very beneficial for work." (学生 #4)

◆ 「通訳・翻訳の基礎知識とスキルを実際的な場面でより応用的に使いたい」

また、全体的な回答結果を見てみると、「通訳・翻訳の基礎知識とスキルを実際的な場面

でより応用的に使いたい」という意識が示された。実際に通訳・翻訳スキルを将来の仕事に活かしたいと答えた学生は 35 中 28 人だった。

"My motivation is to apply the skills practically that I gained in Jokyu Eigo A and B."
(学生#5)

"I want to learn more applications of interpreting and translation in business" (学生#18)

"I was able to use some translating skills during the summer vacation, so I want to learn more and become better." (学生#17)

「授業に対する学生の期待」を問う質問（質問項目 2）に対する回答は、下記のように「実用的なスキルを身につける」という内容が主であった。

◆ 「実用的なスキルを身につける」

"I want to increase my business English vocabulary." (学生 #14)

"I hope to use the class content to increase my business English communication skills."
(学生 #1)

"I don't just want to acquire new vocabulary and communication methods, but I also want to learn how to use them properly." (学生 #8)

◆ 「異文化理解及び認識」

上記の学習モチベーションと講座への期待をたずねる質問（質問項目 1、2）に関連し、「受講した結果、実際にどのようなスキルを身につけることができたか」（質問項目 3）をたずねた。学生の回答から示唆されたのは、ビジネス英語力の上達（35 人中 32 人）、通訳・通訳スキルの修得（35 人中 28 人）の他に国際ビジネスにおいて必要となる異文化理解についての意識（35 人中 30 人）が高まったという声であった。

「授業の実用性をどう感じたか」（質問項目 4）という問いに対しては、35 人中 33 人の学生が実に実用的だと感じたことが示唆された。具体的な理由についての記述は次の通りである。

"Yes, both courses were practical because we were made to use the vocabulary and phrases and the translation and interpreting skills through the tests, tasks and homework." (学生 #9)

"Yes, they were very practical. I did an internship during the summer vacation and I

had to use the translation skills I learnt. It was all very helpful and I now feel confident about using English at work.” (学生 #16)

“Yes, when I went on a student tour to Europe in the summer vacation, I had to interpret for other students and also for some official events, so the interpreting skills and practice helped me to do a good job.” (学生 #20)

“Yes, I’m now thinking about writing my thesis about economic development, so the business vocabulary and the translation skills have given me confidence to do it.” (学生 #2)

最後の質問（質問項目 5）は「授業で修得したスキルを将来的にどのように活かしたいか」ということに焦点を当てた。この質問のねらいは、学生が上で述べた講座の目標をどの程度共有できたかを知ることにあつた。結果からは、その共有を達成できたことがわかる。具体的な回答例は次の通りである。

“I plan to work for a trading company in the future, so the skills I gained are priceless. I’m sure that I will need to interpret and translate at work, so that is where I would like to use these skills.” (学生 #11)

“I am going to work at a foreign insurance company. These courses helped me in the interview because the interviewers asked whether I had any translating or interpreting skills. When I told them about this course, they became very positive, so I think I will have a lot of chance to use these skills.” (学生 #19)

“Although I probably won’t work in an office, the focus of business and translation practice will be useful at graduate school because my field of study is business related.” (学生 #7)

“The courses were hard, but I slowly came to feel I could do the tasks. So, if I have a chance to use English in the workplace, I think I well prepared now.” (学生 #1)

2. 担当者の観察より

春学期と秋学期の両講座で常に学生の反応を観察した。観察における観点は、1) 学生の実務英語スキル（通訳・翻訳）の上達度、そして 2) 学習ストラテジーを学生がどの程度意識できているかという 2 点であつた。

上達度に関しては、毎回の授業の始めに実施した和英・英和の小単語及び翻訳テストの結果からは学生が真剣に取り組んだことが伺え、教員としてのモチベーション向上に繋がる結果だった。ほとんどの学生は単語の暗記度はもちろん、テストの和英英和のセクショ

ンでも直訳ではなく意味を正確にとらえての意識が多く目立った。もちろん文法的な間違いがあったり誤解もあったりしたが、それを学生が自己添削し、クラス全体でレビューしたことによって1人1人の学生の理解度が高まったようであった。授業開始時から毎週実施した小テストにより、学生は自習の習慣を身につけた。単語を暗記するだけでなく、正しい意味や使い方を知りたいという意欲も多く伝わった。

学習ストラテジーを学生がどの程度意識できているかについては、学生は春学期の上級英語 A で初めて通訳・翻訳術（ノートテイキング、辞書やインターネットの使い方、シャドーイング等）に触れたことでもあるが、秋学期の上級英語 B では同様の通訳訓練に戸惑うことなく積極的に取り組んだ。また、授業で実施したタスク（小テスト、通訳練習、翻訳シート等）について、学生から疑問に思う部分や意味確認のための質問が頻繁に活発に出された。スキルを向上させたいという高いモチベーションを維持させることができたことによって、学生が積極的に取り組んだ印象が強い。

V. 考察

前述した回答から、多くの学生に職場で英語が使えるという自信がついたことが示唆される。とはいえ、将来仕事で英語に触れたり実際に使ったりする可能性が非常に高いと感じて履修しており、授業に対する履修意欲と学習モチベーションが高い学生ばかりであった。回答記述は日本語でもいいという条件をつけたにもかかわらず結果的には学生全員が英語で回答したということで、ここでも英語を使うモチベーションが高いことがうかがえる。

授業のどの側面が学生にどのような影響を与えたかについて、具体的に述べる。アンケート実施後の半構造化聞き取り結果から、多くの学生はゼミの資料の英訳をすることによってゼミ研究への理解が深まったと答えた。それに加えて、実社会に出る前に **real world tasks**（例：職場交渉通訳、ビジネスプレゼンテーション通訳、ビジネスレターの英訳等）を授業中でシミュレーションできたことによって、自信がついたという声が少なくなかった。

学生のコメントから読み取れるように、就職活動に有利な自己アピール点や実際に職場で英語が使える就職先を目指したいという声からすれば、学生が当授業の実用性かつ有用性を感じていることも考えられる。つまり、学生のモチベーションに応えようとするのがいかに重要なことがわかる。

VI. 結論と今後の課題

本稿では、ESP型の特徴を重視した授業の有用性を検証する試みで著者が担当する実務英語（上級英語A）、職場コミュニケーションスキル（上級英語B）の流れを述べた上で、学生による学期末の学習モチベーションや授業への期待の回答記述について述べてきたが、ここで有用性が明らかになった点と今後の課題についてまとめることにする。

まず、有用であると学生が感じた点は回答記述の結果で示されている。学生の高い学習モチベーションに応える必要性があることは言うまでもない。学生の学習モチベーションが最も高いところは、同様に、習得したスキルを実用的に活かしたいというキャリアに直結した英語職業志向型モチベーションが高いということもアンケートの回答で示された。モチベーション以外に、言語修得の視点から見てみると、**real world tasks**は習得したビジネス英語の正しい使い方を覚えさせるために役立った。それに加えて、学科科目とのシナジーをはかるためという現代GPの目的に合わせて、ゼミ資料の英訳を期末レポートとする工夫もした。半構造化聞き取りでは、この工夫が学生にとってゼミに対する知識を深めさせることにつながったことが明らかになった。しかし、ESP型の授業実施には、学生自身が習得した英語のスキルを、どのように、またはどのような職種に使いたいかをある程度認識できていないとモチベーションを持たないという限界がある。逆に言えば、学生は自分自身で学習ニーズを感じている場合はモチベーションが高く、授業に対する期待も大きくなる（Dudley-Evans & St. John, 1998; 鹿野, 2008）。学生のコメントを見ると、ESPアプローチの手法を重視した授業デザインの選択は、学生モチベーションをあげるのに役立ち、有用であったと一般的に受け止められたことが示唆された。

一方、授業外での宿題（シャドーイング等）の管理と監視が十分できなかったため、自律学習への意識を高めることが出来たかの点では課題が残った。通訳や翻訳のスキルはもちろん、語彙力を高めるには授業だけを受ければよいというわけではない。それを踏まえて、今後の授業改善として自律学習ジャーナル（授業外で自律的に実施したノートテイキングの練習の頻度や実施による新しい語彙リストの作成などを記録するもの）を取り入れることを考慮する必要がある。そのような指導を取り入れることによって、卒業後でも学生が習得した実用的なスキルをさらに自律的に高めることに繋がるであろう。最後に、今回の実践記録は筆者が担当している授業を対象にしたものであり、筆者が実施したアンケート、半構造化聞き取りと観察の結果を述べていること自体は主観的である。今後は、ESP理論の特徴を重視した授業デザインが学生のモチベーションと有用性への意識にどのような影響をもたらすかを調査した他の研究を参考にし、学部教育目標と言語習得のシナジーをはかる授業を展開していきたい。

参考文献

- British Council. (2006). *Japan Market Introduction*. Retrieved from <http://www.britishcouncil.org/eumd-information-background-japan.htm> on June 16th, 2006.
- Champan, M. (2003). The role of TOEIC in a major Japanese company. *Proceedings of the 2nd Annual JALT Pan-SIG Conference*. May 10-11, 2003. Kyoto, Japan: Kyoto Institute of Technology
- Cheung, D. (1997). Real play in Singapore. In B. Kenny and W. Savage (Eds.), *Language and development: Teachers in a changing world* (pp. 119-128.) New York: Longman.
- Dudley-Evans, T. & St. John, M. J (1998) *Developments in English for Specific Purposes —an interdisciplinary approach*. Cambridge: Cambridge University Press
- Nunan, D. (1989). *Designing tasks for the communicative classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Orr, T (1998) ESP for Japanese universities : A guide for intelligent reform. *The Language Teacher*, 22 (11) : 19-21
- ソルタン・ドルニエイ 著／八島智子・竹内理監訳 (2006).『外国語教育学のための質問紙調査入門：作成・実施・データ処理』東京：松柏社
- 原田邦彦・石川有香・渡辺義和・中郷 慶・松本 茂・樗木勇作 (2008).「特別シンポジウム プロシーディングス 大学英語教育のこれから」, 『日本英文学会中部支部 中部英文学』第27号, 63-82.
- 鹿野 緑 (2008). 「「仕事で英語の使える日本人の育成」の意味する「仕事で使える英語力」調査(1) —ディスコース・コミュニティーからみた大学 ESP 教育—」 *ACADEMIA Literature and Language* (83) January 2008. 名古屋：南山大学